

学内研究組織（2024年度）

研究課題：「大学生の自己成長を促す国際スポーツボランティアプログラムの開発と検証」

国際スポーツボランティア活動と大学生の自己成長との関連の検討

The relationship between international sports volunteer activities and personal growth
in university students

谷本 英彰 (Tanimoto Hideaki)

本研究は、2011年以降に活発化した海外留学等の推進施策のもと、大学教育における国際経験の学習効果を、語学留学中心の先行研究から拡張し、国際ボランティア活動に焦点化して検討することを目的とした。とりわけ、スポーツおよび健康領域に関わる教育的活動を核とする国際ボランティア・プログラムの学習成果を、大学生の自己成長の観点から明らかにすることをねらいとした。対象は、インドネシアにおいて運動会の実施および健康教育に関わる授業運営に参加した大学生7名である。本研究では、渡航前・渡航中・帰国後の3時点で半構造化面接を実施し、発話の逐語録を作成したうえで計量テキスト分析を行う縦断的質的アプローチを用いた。分析は、3時点のテキストデータをカテゴリー化し、自己成長の知覚内容の差異を把握するため対応分析を実施した。

分析の結果、渡航前では「説明」「言える」、渡航中では「通じる」「不安」、帰国後では「人前」「緊張」など、各時点を特徴づける語が抽出された。逐語の精査から、渡航前は必要情報の取捨選択や相手の立場を踏まえた言葉選びなど、他者に対して自らの意見を簡潔に伝える力の発現・強化が示唆された。渡航中は第一言語が異なる相手との相互作用において、非言語的手段を含む伝達方略への気づきが多く、直ちに能力向上を実感するというより、今後必要とされる能力へのメタ認知が高まったことが示された。帰国後は「人前での発言・説明」に対する抵抗感の低下や緊張の緩和が語られ、現地での大人数を前にした運営・説明体験が汎用的なプレゼンテーション能力や対人自己効力感の向上に寄与したと解釈される。

以上より、国際スポーツボランティアという実践的・協働的状況は、言語・文化差を前提とする対人コミュニケーション能力の形成において、①渡航前の準備段階での表出スキルの強化、②現地滞在中における異文化間の相互理解を巡る方略的気づきの獲得、③帰国後の対人場面における自己効力感の高まり、という段階的プロセスを促進する可能性が示唆された。本知見は、留学型に偏重してきた国際経験の教育効果研究に対し、ボランティア型実践の有効性を補完的に位置づけるものであるといえる。

一方、対象が少数で単一プログラムに限定されていること、自己報告に依拠した指標であることは本研究の限界であるといえる。今後は、比較対象群を設けた研究デザインや量的尺度との混合研究を通じて外的妥当性を検証するとともに、活動内容（運動会運営、健康教育等）の構成要素と学習成果の対応関係を精緻化し、大学カリキュラムへの組み込み方針と評価枠組みの開発を試みる必要がある。